

はじめに

2010年、当時東京都知事であった石原慎太郎氏がセクシュアル・マイノリティ（性的少数者）に対する差別的な発言をして非難されたのは記憶に新しいところです。この時の発言をめぐって、2014年に日本弁護士連合会は「東京都知事による性的少数者差別発言に関する人権救済申立事件」の調査報告を発表、石原氏の発言を人権侵害であるとして「警告」を行っています。それでもなお、議員等公人によるヘイトスピーチ（差別煽動表現）やホモフォビア（同性愛嫌悪）の表明が繰り返し報道されています。

もちろんホモフォビアはテレビの中だけの話ではなくて、路上や、ときに親しいひとたちとの飲み会の席や家の中でさえもおこっています。差別的な言説を聞くたびに、いったいいつまで声を上げつづければいいのかと気が滅入ります。

ホモフォビアのみならず、世間にはありとあらゆる差別と偏見が横行しており、いつも誰かが尊厳を傷つけられ、社会的排除にさらされています。「傷つけられることがデフォルトなんだよ」と言ってしまうまでもありません。たしかに、《わたし》自身、傷つけられることを「いつものことだね」と軽く流してしまっているのも事実です。傷つけられることを真正面から受け止めてしまうと、《わたし》の日常は苦しみに覆われ、おだやかな日々を過ごすことができなくなってしまうからです。出自や、自分自身で変えようのないことを恨んだり哀れんだりしてみても、それでなにか事態が好転したり、解決したりなんてしません。いまを生きることを肯定し、他者との関係を実りある豊かなものとするには、怒りを表したり、抵抗したりすることもさることながら、いじめからさっさと逃げたり、嫌悪をさらりとかわしたり、自らをちゃかした

りすることも「生きのこる」ために必要なことだったのです。

■「生きていていいと思える社会を創る」技術、それこそがアート！

とはいえ、いつまでも逃げてばかりいても埒がきません。もともと「ゲイ(gay)」という言葉には、「陽気な」とか、「派手な」といった意味があるようですが、根が楽天家の《わたし》は、その語源に立ち返って、どうせなら楽しくアクションを起こしたいと考えるようになりました。そんな矢先、「クィア(Queer)」という言葉を知りました。クィアには「風変わりな」「奇妙な」「異常な」といった意味があり、それが転じてかつてはセクシュアル・マイノリティを侮蔑するための差別的な言葉として使われていたそうです。ところが、当事者たちがその言葉を逆手にとって、男／女という性の二極化から脱し、さまざまなマイノリティとの連帯を可能にするあたらしい概念として、ポジティブな意味で使うようになったというのです。

侮蔑的な言葉の意味合いをクリエイティブに変化させる、まさにそのような《ズラシ》のための「技術」が必要なのです。《わたし》は、その「技術」のことを「アート」とよんでいます。アートがもつ、社会の支配的な文脈や価値観をズラす^{わざ}技と術は、《わたし》が「^{すべ}尊厳をもって生きる」という根源的な意味において、とても必要な能力なのです。

つねづね、「なんでアートの仕事をしているの？」と聞かれると、「自分が生きていていいよと言ってもらえる社会を創りたいからだよ」と答えるのは、まさにそんな経験からきているのです。

■Cafe LGBT+連続講座「たたかう、アート！」

《わたしたち》Cafe LGBT+^{プラス}は、セクシュアル・マイノリティ当事者／非当事者の垣根を超えたゆるやかな集いの場とコミュニティづくりを目指し、京都にある「ソーシャルキッチン」というカフェを拠点に毎月第4金曜日にコミュニティスペースを開いています。LGBTとは、レズビアン(Lesbian)、ゲイ(Gay)、バイセクシュアル(Bisexual)、トランスジェンダー(Transgender)の頭文字を取って作られた語で、セクシュアル・マイノリティや多様な性のあり様を現した言葉です。Cafe LGBT+^{プラス}は、そこに「+」をくわえ、LGBT当事者の

みならず、多様な性があるがままにとらえ、なにものにも接続可能であるというポジティブな意味合いを込めました。

Cafe LGBT+ では、その日その場に集まったもの同士で話し合い、どんな活動をしていくかを考えます。2015年に大阪市立大学都市研究プラザの助成を受けて開催した連続講座「たたかう、アート！——LGBTの権利獲得運動とアートの関係を探る」も、そんな話し合いのなかからうまれました。この講座を企画するにあたって、当初3つのテーマを設定しました。ひとつはセクシュアル・マイノリティの置かれている状況を科学的根拠に基づいて把握すること。そして、セクシュアル・マイノリティの権利運動とアートの密接な関係を、歴史を紐解く中で理解すること。最後に、日本でセクシュアル・マイノリティの目線に立って活動するアーティストを紹介することでした。

セクシュアル・マイノリティは、その存在が歓迎されない社会のなかに生きています。それゆえに、自分の性的指向や性自認などを表に現すことを躊躇します。これは身近な人びとから排除されることをなによりも恐れているからであり、いまの自分の立場が瓦解することや職を失うことを恐れているからです。実際に自分のセクシュアリティを表現してみたら、もしかしたらあんがい歓迎されるのかもしれませんが。あるいは、戸惑いながらも受け入れてくれるのかもしれませんが。たとえそうだったとしても、やっぱり《わたし》はためらい怖気づくのです。

だからこそ《わたし》は、恐怖を軽やかに乗り越えて表現するアーティストに尊敬の念を抱き、そこから生み出されるアートに勇気づけられてきたのです。ですが、興味深いことに、結論を言うと「たたかう、アート！」は、必ずしもアーティスト個人のアート活動を手放しで賞賛する会とはなりませんでした。それは、アートというものは元来、アーティストの個人的な事柄を表現する技術であり、必ずしも社会規範に抗い、他者の心情をおしはかって表現するものではなかったからかもしれません。「《わたし》は、アーティストである前に、ひとりの人間です」。第4回講座のゲストであるブブ・ド・ラ・マドレーヌさんのこの指摘は、社会的排除に対して抗うのはアーティストである以前に《わたし》自身の存在をかけてであり、アートは必ずしもそれにコミットする必要はないというものでした。たたかうのは人間としてであり、アーティスト

である必要はなかったのかもしれませんが。

それでもなおCafe LGBT+は、昨今の社会的連帯をうみだす表現技法としてのアートに希望を見出し、引き続き期待を寄せていることに変わりありません。いま、若いアーティストたちを中心に、世界的なアートマーケットが牽引するヒエラルキーから逃れ、大衆性を帯びたアノニマスな表現を獲得しようとする「アートの行為」が台頭しはじめています。なかには、アーティスト個人の権利である著作権すらも拡散させていくといったラディカルな方法論もみられます。これらの諸活動は、オルタナティブなネットメディアなどを介してデモやフラッシュ・モブといった社会運動の現場とも連動し、相互に影響を与えています。こうした表現は、あらたな「抗いのアート」とも言えるかもしれません。

■講座を終えて——本書によせて

連続講座「たたかう、アート！」を終えて、改めて実感したことがあります。それは、「アライ (Ally)」の存在の大きさです。アライとは、セクシュアル・マイノリティ当事者ではないが、社会的に排除される人びとと共に行動し、率先して異議を表明する人のことを指します。アライは、セクシュアル・マイノリティの心の大きな支えとなるばかりか、「表現すること」への勇気を与えてくれる存在です。

社会における支配的な規範、つまり「文化」を変えるには、排除される側がどれだけ声をあげても解決には至りにくいでしょう。マジョリティだと自認する人びともまた、文化を変えることには恐怖を感じるに違いありません。アライの存在は、世間がマジョリティ／マイノリティという極端な二項対立によって成り立っているのではなく、そこに不可分な連続性があることを示してくれるとともに、変化を恐れる必要はないということを身をもって示してくれます。

《わたし》の表現を、《わたしたち》の表現、社会の表現へとひろげていくためにも、その技術としてのアートとおなじく、アライは不可欠な存在なのです。

本講座で紹介した専門家や研究者・アーティストに蓄積された経験と情報は、NPOなど社会的な活動を行う団体やアート実践者に非常に役立つものでした。本書には、これら講座でのプラクティスにくわえ、計画から実施までの

一連のプロセスを通して得られたエッセンスを込めています。この本が読者に有益なものとなることを願っています。

なお、本書の各章は「質問に対する応答」「講演の雰囲気再現した話し言葉での記述」「学術論文」など、さまざまな形式で執筆されています。これは論者それぞれの表現のスタイルを重んじたものです。

また本書を作成するにあたり、多くの方々からご支援を頂きました。Cafe LGBT+の皆さん、ソーシャルキッチンの皆さん、NPO法人アートNPOリンクの皆さん、大阪市立大学の皆さん、NPO法人こえとことばとこころの部屋（ココールム）の皆さん、釜ヶ崎芸術大学の皆さん、連続講座「たたかう、アート！」にご参加頂いた皆さん、本当にありがとうございます。また原稿の細かな校閲を行ってくださった吉田さん、法律文化社の掛川さんには多大なご尽力を頂きました。この場をかりて深く感謝申し上げます。

2015年12月

樋口貞幸

*本書は、2015年の夏に5回にわたって実施されたCafe LGBT+連続講座「たたかう、アート！——LGBTの権利獲得運動とアートの関係を探る」の講義録を再編したものです。